



編集月旦 2015年9月号

★戦後70年目の8月、「安倍談話」が出る前に「堀田談話」を聞いて置きたいと願って、堀田力さわか福祉財団会長をお訪ねした。戦争をしない文明文化の世をつくるには、「男性が“命の感覚”をつくらないといけない」と堀田さんはいう。

☆戦う性である男たちは、国会で「安保法制」を論じて、平和を守るためといって戦場のさまざまな場面を取りあげたものの、そこに「命の感覚」はうかがえませんでした。

★「命」が細い一本の糸に託されているような危うい状態にあることを「命若懸糸」といいます(『敦煌変文集「大目乾連冥間救母変文」』など)。かつて大正7年に芥川龍之介が『赤い鳥』創刊号に書いた「蜘蛛の糸」の犍陀多(カンダタ)の姿が思い出されます。上記の原典では目乾連(モクケンレン)が地獄から母を救い出そうとするのですが、犍陀多のほうは蜘蛛の糸にすがって地獄をのがれて極楽へたどり着こうと喘ぎます。

天国と地獄というのは大正時代に格差が広がってゆく時代の表現だったのでしょうか。そこで「自分だけは」と考えた犍陀多は地獄に落ちていきました。後に昭和になって自死する芥川がその後の生きづらい時代までを予見していたかは不確かですが。

☆平和を守る意思を示す国会前の集会で出会った人びと。家にいたたまれずやってきたアンポ世代の高年者と将来、産み育てる子どもたちの戦争での死を予見するがゆえの若い女性たち。その率直な行動に共感を覚えました。平和について戦いの現場しか語らなかった国会内の男たちに対峙する、産む性としての「命」への感覚が息づいていました。

☆8月14日、戦後70年目の「首相談話」で、左右のプロンプターを交互に見ながら原稿を読んだ安倍首相。記者会見は「安倍談話」とはいえない「安倍朗読」(よく読めていて、新聞記事と合わせてみると、2カ所の読み落としと「手」と「力」と読み違えて「力を携えて」としたところくらい)でした。内容は近隣諸国への謝罪の文言が重ねられていて、戦禍から立ち上がって70年、この平和な日本を築き上げてきた国民を誇りとし、高齢の人びとをねぎらうことばが際立たなかったことが首相の意識の位置を表現しています。

☆戦後の復興と繁栄の功労者である高齢者のだれもが、後人に敬愛を受けて暮らし、国際的指針である「国連高齢者五原則」のひとつ、「尊厳」をもって人生を終われるのが「高齢社会」の姿です。少なくともその方向にむかっていることが、次の世代の人びとの安心感となります。それどころか、次の世代から「下流老人」がいわれ、「老後破産」がいわれて、若い世代への再生産が危惧されています。率直に言えば、高齢者の実人生がわからず解決策を示せない現役世代によって提起されてはいけない課題であり、同名の著作がベストセラーになってはいけません。——必死で働いてきたのにむくわれない老後——この共通したつぶやきは、両著にとどまるものではないでしょう。

★責任はだれに? 1995年の「高齢社会対策基本法」の制定いらい20年、こういう社会を呼び寄せてしまった政治リーダー・官僚であり、企業家、学者・研究者であり、マスコミ、そして活動家でしょう。絞れば高齢社会のしくみの全容を見渡せる立場にあり、その対策を講じることが務めであった歴代の高齢社会対策担当大臣であり首相です。

★『丈人力のススメ 人生90年をどう上手に踏破するか』は、「日本高齢社会」の20年の経緯を考察してきて、どうあるべきかの対策を提案する論考です。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成と、アジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり、高齢者の課題であり、本誌の目標です。(編集人 記)

